

人形町のパチンコ屋での思い出

新型コロナウイルスで社会が大きく変わった。

投資の世界では景気は良いようだが、実質経済はとても不安な座標に立っている。

私も仕事を減らし、会社を畳んで年金暮らしを考えるようになっている。

そういえば、2010年に、景気回復の戦略について語ってくれたおっさんがいた。

人形町のパチンコ屋で知り合ったおっさんだ。

当時私は、厚生労働省の老健局のとある委員になっていて、月に一回登庁して人形町のパチンコ屋で3時間ほど時間を潰すのが日課だった

ホームレス風の容姿だが、東京都産業労働局金融部のエリートだったらしい。

2008年のリーマン・ショックは日本経済を地獄にした。

当時、東京の2割の世帯は貯蓄がない実質経済だったため、東京都は未曾有の失業者とホームレスの増加を予測した。

そして、公務員の人員削減を視野にいれたテコ入れがあり、早期退職制度を利用して悠々自適の生活をしはじめたという。

おっさんは、「日本は物価や賃金を下げてリーマン・ショックを凌いだんだ。」

「デフレだ。賃金デフレを起こして失業者を抑えたんだ。」

「しかしこれは対症療法だ。」「日本の景気は良くなるはずがない。」

「どの国の企業でも経営不振になると解雇者を出して、組織を再起動して健康になっているのに、日本はちがう。」

「企業は成長戦略に対し、解雇という方法で解決すべきなんだ。」

「これからの政府の仕事は、解雇者が安心して暮らせる社会保障を設計して、企業は解雇者をどんどん出して、成長性・生産性のある分野に業態をシフトして、そこで雇用を促進すれば経済はぐるぐる回るんだ。」と言っていた。

群馬県のパチンコ屋にはあんなおっさんは絶対いない。

1400万人が住む東京は計り知れない知恵の集合体だと思った。

あの当時、アベノミクスは金融政策・財政政策・民間投資成長戦略の「三本の矢」っていうやり方で景気回復を目指した。

社会は労働者で成り立っている。金融中心のアベノミクスより、おっさんの「解雇者保障経済グルグル論」のほうが私には心に残る。

政府には大胆な社会保障政策をしてほしい。